

世界はひとつではないし、日常は繰り返してではない

鈴木美緒

SUZUKI, Mio

東海大学工学部土木工学科准教授

私の最初の就職先は運輸政策研究所(当時の名前)で、当時は何の役にも立たない末端研究員でしたが、このたび編集委員にお声がかかり、幾年を経てまたご縁ができました。と言っても会議自体はウェブなので、まだ実感が沸いていないところもありますが、

オンラインでの会議やセミナーもすっかり馴染み、どこでもセミナーや会議に参加できる便利さを享受していますが、一方でようやく対面でのイベントの機会も復活してきて、そのありがたみを感じています。画面越しにお話ししていた方でも、実際に顔を合わせるについ「お久しぶりです」とご挨拶してしまい、対面でのコミュニケーションにしかない価値に気づかされました。出張なども数年ぶりだと新鮮に感じて、どこかへ出かける行為自体の大切さを実感しています。3年前、コロナ禍の外出自粛期間中に近所のスーパーがごった返しているのを見て、家から出たいだけでなく、どこかに行きたいんだらうなど、勝手に想像していました。無意識でも、移動の価値を知った人はきっと多いと思います。

一方で、「出張なんていらない、もうずっとオンラインでいい」と思う人もいます。そんなふうには、COVID-19という制御できない何者かに振り回されることで、ルールやモラルの考え方は身近な人でも大きく異なり埋まることはない、価値観の深い溝を改めて認識する機会になったと思います。どこかに行く行かないとか、マスクしない人を注意するかしらないかとかに限らず、これだけ世界が当たり前で平和を願い、その気持ちを表明しても、ウクライナ侵攻を止めることはできない現実を目の当たりにしています。結局のところ、世界は全然ひとつでなく、国であろうが地域であろうが、全体に翻って個人の本質を問われ(あるいは強く意識させられ)、価値観の多様性を受容し、折り合いをつけていくことが求められている気がします。

対面での日常が「戻った」という表現をしがちですが、実際は過去とは違う異なる日常が流れていて、私たちが扱う交通行動も、統計上の数値だけではわからない価値観を包含しているし、多様な行動の集合体の代表的な数値を見ているに過ぎないのだと、この時代だから改めて感じます。特に大きなうねりを超えたいま、こんな

もんだらう思っていた列車の遅延や満員電車で辟易する気持ちが掘り起こされたり、要らないと思っていた通勤時間が頭の切り替えに意外と大事だと思えたり、あらゆる人が将来の移動に影響する気付きを得ているところなのではないでしょうか。

観光でも、全国旅行支援などの施策があれば当然、「せっかくだから」と出かける機会が多くなりますが、そうでなくても移動できる環境へのありがたみが、乗降客数や宿泊客数の統計に何らかの影響を及ぼしていると思われま。最近起きた観光に関する重大事故に、昨年4月の知床遊覧船沈没事故があります。コロナ禍でありながら少しは観光を楽しめるようになった時期で、「せっかくだから」遊覧船に乗りたいという気持ちが高まりやすいタイミングだったのかも、と想像すると、より無念さが増します。価値観を追求すれば、異なる主張の研究が存在することにもなりますが、それが面白味でもあります。さまざまな場面での交通行動が良い思い出となるように、データに現れない深層にも心を寄せて、多様な価値観で、運輸のサービスレベルや安全性の向上に資する調査研究を蓄積していきたいものです。(私自身も末端研究員の黒歴史を上書きできるよう精進しなければ)

ところで、学生はオンライン講義の方が気軽に質問しやすいそうです。授業をする側からだと、学生が露骨に聞いていない対面の講義も、本当に画面の前にいるのかわからないオンライン講義もメンタルを強くしてくれますが、私自身の経験でもオンラインでの学会では「下手なこと言えない」と緊張する場面は少なかった気がします。ただ、あの勝手に緊張して結果を張る経験は、いまでも私を育ててくれています。そのようなエネルギーは対面でないと受け取れない、大切なコミュニケーションです。若手時代に師匠の前で意見を言うのは特に緊張したのですが、質はともかく今では誰にでも平気で意見が言える人に変身(成長?)しました。そんなふうで育ててくれた師匠には感謝しています。大きなインパクトのある毎日でも振り返ると一瞬に思えるのもまた真実…今年で定年なんて、時が経つのは早いものです。